

## 6) ハボタン=葉牡丹

ハボタンはアブラナ科の多年草である。園芸的には一年草として扱われ、不結球キャベツの栽培変種として鑑賞用に広く栽培されている。高さは25~60cmに達し、茎は太く紫色を帯び直立する。キャベツに似て短い茎に有柄の大きな葉を付ける。葉の先が縮緬状に縮れる種(名古屋ハボタン)と、丸葉の種(東京ハボタン=江戸ハボタン)との二つに大別される。丸葉の種には大阪丸葉ハボタンもあり、中間的な雑種やさまざまな交配種も多い。最近では切れ葉のサンゴハボタンなども育成されており、秋から冬にかけて紅紫色、淡黄色、白色などの美しい葉色をあらわす。原産地は意外にもヨーロッパで、江戸時代に日本に渡来し、日本を中心に改良されたものである。和名の由来は葉が花のように色づき、球状に集まる様をボタンの花に見立てたものである。別称としてはボタンナ、タマナ、インゲンナなどともいわれている。学名は『*Brassica oleracea*』で、属名はキャベツのラテン古名、種小辞は「畑で栽培の」という意味である。

ハボタンは原産地のヨーロッパではもっぱら食用や、家畜の餌として栽培されていた。貝原益軒が1709年に著わした『大和本草』には、「紅夷菘(オランダナ)一名サンネンナ」と記されている。これがハボタンの元祖と考えられており、さらに「味よし…植ゑて後三年にして花開く」と記されているところから、当初は食用として輸入されていたものが、やがて鑑賞用になったものと思われる。さらに時代が進み、1719年に伊藤伊兵衛が記した『公益地錦抄』には、「諸葛菜(シヨカッサイ)として「花ウコン色、葉は丸くしげく付く、花葉ともに賞美せり…」と記され、この記述とハボタンの特徴とがよく合致する。ハボタンの名前が初めて文献に登場するのは、山岡恭安(ヤマオカキョウアン)が1778年に著わした『本草正正譌』(ホンゾウセイセイカ)で、「ボタンナ一名ハボタン」と記されており、葉の色が美しく、花のない季節に彩りを添えたところから、やがて野菜よりも観葉植物としての地位を獲得していったものと思われる。現在では正月にはなくてはならない植物として、松竹梅と寄せ植えにしたり、生け花の材料として切り花にしたり、花壇の縁取りなどの材料にしたり、さまざまな形で利用されている。

繁殖は7~8月に播種し、本葉が3枚になった頃に仮植し、9月下旬頃に定植するもので、栽培にあたってはアオムシによる食害が大きいので、適宜殺虫剤を散布して駆除する。またアブラムシなどもよく付くので注意が必要である。ハボタンを屋外で冬から春まで植えっぱなしにしておくと、3月頃になると菜の花に似た淡い黄色の花を開き、甘い香りが漂う。また花瓶に挿しておくといつのまにか発根し、2~3カ月以上も美しい色彩を保つこともある。つまり挿し木も簡単にできるというわけである。とにかく丈夫で美しく、しかも親しみやすいヨーロッパ生まれで、日本育ちの観葉植物なのである。



昔はお正月には欠かせない彩だった。しかし実は西洋から移入された植物で、日本のお正月の伝統的なフクジュソウやスイセン、マンリョウなどとは異なる出自である。



葉は色の変化が豊かである。春までそのままにしておくと、淡い黄色の菜の花が咲く。



花はアブラナと同じ形のやや淡い黄色で、カリフラワーやブロッコリーに似ている。

[目次に戻る](#)